

滑稽俳句と詩

小町 圭

これまで、第十回と第十一回の滑稽俳句大賞の審査をさせていただいた。考えついたことがあり、まとめてみた。

「滑稽俳句」だけに限ったことではないが、俳句は、作者の意図することをそのまま詠んだだけでは面白くない。予定調和や、雨が降ったから地固まる式のありきたりでは、ああそうですね、そう書いてありますものね、で終わってしまう。どこかで屈折していなければならない。屈折とは、例えば「切れ」で、ひょいと転換することである。俳句で「切れが大切」というのはこのことである。

切れと同時にリズムも大事で、五七五のみでなく、時に内容によっては、ひょいと六六五とか、七七五とか乱調になることもある。昔、ある先輩（先生）が、「七七五というのも一つの活用であって、活用表現として認められても良いのではないか」と言われていた。その方は、とても厳格な古式調の句を詠まれる方だったので、意外な発言にびっくりしたことがあった。

滑稽、このおかしさは、なかなか幅広くて奥深い。すぐに解る単純な笑いもあれば、一見、不可思議で難解ながら感覚的に理解すべき奥深い笑いもある。だがやはり、俳句には不思議さを感じたい。不思議さとは「詩」であり、限りなく詩に近付いている時、筆者などは、これだ！ よっしゃ！ と胸が高鳴る思いがする。以下、好きな句をご紹介します。

想像がそつくり一つ棄ててある

あべせいあい
阿部青鞋

いきなり無季の句を出して驚かれたかもしれないが、阿部青鞋の代表句である。青鞋は、東京生まれ（一九一四年～一九八九年）で、渡辺白泉や永田耕衣とも交流があった俳人。

若さとはこんな淋しい春なのか

すみたくけんしん
住宅顕信

ずぶぬれて犬ころ

顕信

住宅顕信は、一九六一年、岡山に生まれ、白血病のため二十五歳で逝去した俳人である。青鞋が牧師の経歴をもつのに対して顕信は、僧侶の経歴をもつ。その作品には誰も詠んでいない魂の詩がある。

白馬を少女 けが 瀆れて下りにけむ

西東三鬼

西東三鬼は、岡山生まれ（一九〇〇年～一九六二年）。六歳で父親、十八歳で母親を亡くし、東京の長兄に引き取られる。歯科医になり患者に誘われて俳句を始め、「ホトトギス」的伝統俳句から離れた新興俳句運動を展開する。「俳句は最も人間的な声であるべきだ」「人間の声はいつでも超季的だ」として、無季俳句を詠み、新興俳句の旗手、鬼才と呼ばれた。俳号の「三鬼」はサンキューをもっているとか。

階段を濡らして昼が来てゐたり

せつつゆきひこ
攝津 幸彦

攝津幸彦は兵庫県生れ（一九四七年～一九九六年）で、意味が伝わるだけでなく、新しい独自の抒情性を追究した。

滑稽俳句の定義は俳人によって違うだろう。筆者は俳句に詩を求めるが、その詩の定義も俳人によって違うだろう。今回は、あえて無季の句を紹介したが、俳句における詩を考えるヒントになれば嬉しい。